

高松市茶臼山古墳の基礎的研究 I

－円筒埴輪の整理から－

蔵本 晋司

1. はじめに

高松市茶臼山古墳は、高松平野東端、新川東岸の標高約50mの独立小丘陵頂部に所在する。昭和44(1969)年に、採土工事に伴い緊急調査された。調査の結果、全長約75mの前方後円墳で、後円部に2基の竪穴石槨、前方部上に粘土槨?と箱式石棺の計4基の埋葬施設を有する古墳であり、中心埋葬の竪穴石槨からは、舶載の画文帶神獸鏡や鍬形石、鉄製武器類、玉類などの豊富な副葬品が出土した。本県において比較的早くに墳丘部分も含めて詳細な調査がなされた前方後円墳であり、調査成果からも本県の前期古墳時代を考察する上で学術上貴重な資料として、関係者の多大な尽力により、昭和45(1970)年に県指定史跡に指定され現地保存されている。

本墳はこれまで、規模の比較的大きな盛土前方後円墳で、安山岩板石を小口積みした長大な石槨と割竹形木棺、上述した舶載鏡や鍬形石を含む多彩な副葬品の内容から、漠然と「畿内的な性格」を有する古墳として評価されてきた(香川県編1983)。また調査以来40年近くを経過して、竪穴石槨(玉城1985、都出1986、宇垣1987)、前方部埋葬(上垣2002)、円筒埴輪(古瀬1993、大久保1996)、画文帶神獸鏡(小山田1993)、鍬形石(渡辺1977、北條1996、森下2005、川口2006)、鉄鏃(松木1996、鈴木2004)など、本墳に関する埋葬施設や個々の出土遺物などに関する研究は、さまざまな角度から深められつつある。また私も、墳丘形態や竪穴石槨石材、供獻土器について、個別に検討を試みたこともある(蔵本1994b・1995・2004a・2004b)。しかし、こうした重要な内容を有する古墳ではあるが、その評価や位置付けに関しては、調査の翌年に簡単な概要を記した報告書(香川県編1970、以下「概報」と記述)が刊行されて以来、基本的な諸資料の詳細が未公表ということもあり、これまで低迷してきた。今回、資料を保管する香川県歴史博物館のご配慮により、埴輪類について調査する機会を与えられた。ここでは、その成果について報告しようとするものである。

さて、昭和44年の調査時に出土した埴輪類は、現在香川県歴史博物館に28入りコンテナで10箱、香川県埋蔵文化財センターに同2箱が保管されている(註1)。ほぼすべて5~10cmほどの破片資料であり、一部に未洗浄の資料も含まれる。過去におこなわれたのであろう若干の整理作業により一部は接合されているが、大半は未接合状態のまま、ビニール袋に出土位置などを示すラベルとともにに入れられ収納されている。また歴史博物館所蔵資料は、調査後長らく瀬戸内海歴史民俗資料館に保管されてきたが、平成16年4月1日付で歴史博物館へ移管され、それに際して再整理がおこなわれ、新たに資料番号が付されている(註2)。

このような状況のため、私個人の力ですべて資料化することも困難であり、いたずらに安易な資料整理をおこなっても混乱を助長するだけと判断し、現状での必要最低限の図化にとどめた。上述したように調査当時の資料も未公表で、個々の遺物の出土状況などの基本的データも参照できない。このような限定された条件の中で、一部の資料のみを取上げることに批判的な意見もあろうかと思われる。しかし、かつて検討したように、東四国地域において最初期に円筒埴輪が導入された古墳であり、本地域の古墳時代史を考察する上で重要な位置を占める本墳の資料を公にする必要もあると判断し、今回報告することとした。なお、すでに実測図などが公開されていると思われる資料もあるが、新たに図面を作成して、

研究の便を図ることとした。

では早速に、円筒埴輪の内容について記述しよう。

2. 円筒埴輪について

出土状況 詳細は不明。上述したように、出土位置を記したラベルとともに、ビニール袋に入れられ収納されている。一部に出土位置が不明な資料もあるが、大半の埴輪はこのラベルによって出土位置が前方部にあることが判明する。後円部は、墳頂部を中心に広く調査されているようだが、概報に埴輪に関する記述はなく、また保管資料中にも後円部から出土したことが確実な資料はない。後円部には本来、埴輪が樹立されていなかった可能性が高いと判断される。

ラベルには、細かな出土位置などを示すトレンチ番号が、記号化されて記されている。それが前方部のどの位置を示すかは、記録した図面類がなく不明である。ただし概報に、「前方部の墳丘の裾は地山をカットし、(中略) このカット面の裾から巾約10mにわたって地山の整形されたフラットな面があり、ここから土壇2基、組合せ箱式石棺2基が発見されている。又この面には埴輪片、葺石も相当発見されている」事実とともに、第六主体箱式石棺埋土中からも埴輪が出土していることが記されており、前方部前面周辺で一定量の埴輪が出土したことは間違いない。出土位置が判明する埴輪の多くに、「ZR1T」や「ZL1T」と記されたラベルが付されており、概報の記述からこれが前方部前面に設定されたトレンチである可能性が高い。なお概報中に「前方部裾付近出土の土師器」として写真が掲載された土師器甕に、「ZR1T」と記されたラベルが伴っていることもこれを傍証しよう。

また、前方部前面での埴輪の樹立痕跡について、概報には何も記載されていないことからすれば、本来の樹立位置と出土位置が異なることが予想される。さらに、前方部前面以外からも円筒埴輪は出土しているようだが、それが前方部のどの位置になるか細かな場所は不明で、出土位置不明の資料を除いて、その量も多くない。こうした埴輪の出土状況から判断するなら、その本来の樹立位置は前方部頂部であったと推定される。頂部以外にも埴輪が樹立されていた可能性を否定することは困難だが、出土資料から判断する限り、その可能性は乏しいと考える。なお前方部頂部には、第三主体の箱式石棺が構築されている。前方部頂部での埴輪の出土状況は不明で、埴輪の樹立位置と石棺との関係はわからない。

上述したように埴輪類は、コンテナ12箱にわけて収納されている。同じコンテナに埴輪以外の資料も混在しており、埴輪のみを抜き出して再収納すればコンテナ6箱程度となろう。埴輪類には円筒埴輪と壺形埴輪があり、細片化した壺形埴輪の体部破片と円筒埴輪のそれを、未接合のまま分離することは、必ずしも容易ではない。さらに、全形の判明する資料はなく、器高や突帯条数など詳細は不明であり、樹立位置も特定できない。墳丘を広く調査したとしても、保管する埴輪が、墳丘上に樹立された埴輪すべてでないことは自明である。このようななかでコンテナ6箱分の埴輪の破片から、当初古墳に樹立された正確な個体数を算出することは、およそ不可能といわざるをえない。かろうじて口縁部の総出土破片数をカウントして、3個体という数字が得られた。この推計とともに概報に記された出土状況などを考慮すれば、前方部頂部に数個体が樹立されるのみで、囲繞供献の可能性は乏しいと結論される。

なお、埴輪はすべて破片となって出土しており、近接して出土したと考える同じビニール袋の中の破片でさえ接合可能な資料は多くない。このことから埴輪は墳頂部から転落・破損後、埋没までの間に地表に露出していた時間が長く、様々な要因によりさらに破損が進行し、また散逸した可能性が想像される。つまり、出土資料からは推計した総個体数の信頼性に疑問が生じ、より正確を期すためには、調査

資料の公表や本格的な整理作業を待たなければならぬ。したがって現状では、囲繞供獻はなされていなかつた事実を確認することで満足したい。

口縁部（1～18・30～33） 口縁部はいずれも、都月系埴輪の系譜下にある受口状を呈する。18点を図示したが、接合しない同一個体を重複して図化した可能性は高く、必ずしも実態にあったものとはなつていない。いずれも細片化しており、口径は概ね50cm程度となろう。

その細部の形状は、一次口縁より二次口縁が垂直に立ち上がり中位より外反して開くAタイプ（1～4・7～12・15）と、二次口縁の基部付近より強く折り返して開くBタイプ（5・14・16・17）の2者が認められる。また端部は、単純に丸くおさめる1類（1）と、概ね矩形におさめ、端面は外傾する面をなす2類に大別される。さらに2類は、その細部形状から、端部下端を外方へ強く引き出し、上端をわずかに上方へ摘み上げる2a類（6）と、下端の

引き出しがあまく、上方への摘み上げもみられない2b類（2～5）に細別される。下端を強く引き出す2a類では、引き出し時のヨコナデ調整により、端面は鈍くくぼむ。口縁部の形状と端部形状との関係は、Aタイプの口縁部の端部に1類及び2a類となるもの（1・4）が認められ、同様にBタイプに2b類のもの（5）などが確認できるのみで、口縁部形態と端部形状が相関する関係にあるかどうか詳細はわからない。

次に、その成形手法を復元（8・10・11・13・15～17、図版1-1・2）しよう。口縁部の成形は、まず円筒部上端の粘土を5～6cm程度強く外方へ折り返して、一次口縁の基部となる部分を成形し、一定程度乾燥させる。さらにその上面に、粘土紐を内傾接合し、内外面にナデ調整を加えて一次口縁を完成、乾燥させる。その際、端部上端をわずかに上方へ摘み上げ、端面は内傾し、ヨコナデにより鈍くくぼませる（11、図版1下）。これは本地域の広口壺の口縁端部に通有の形状であり、二次口縁の粘土を貼付すると隠れてしまう部分にもこのような細工を施すことに、この埴輪製作工人の技術的な系譜を読み取ることができる。この点は後述しよう。また、一工程毎に一旦乾燥工程を挟むことで、粘土付加時の荷重による歪みを極力回避することができ、意図した形状にほぼ近い形に仕上げることが可能となる。乾燥後、その端部前面を包み込むように粘土紐を接合して外上方へ挽き上げ、二次口縁の基本形を完成させる。その後一次口縁と二次口縁の接合部付近の内面に粘土紐を充填し、補強する。これによって、二次口縁の接着面がよりひろがり補強され、二次口縁を強く外反などした場合でも、歪みや剥落を防げる。

こうした乾燥工程を挟みながら粘土紐を内傾接合させて口縁部を成形する技術的素地は、かつて私が「擬頸部分割成形技法」と呼称した在地の弥生後期後半～布留古相期の広口壺や二重口縁壺、複合口縁壺などの口縁部成形技法（藏本1994a）の延長上にとらえることが可能である（註3）。さらに上述した一次口縁端部形状へのこだわりとともに、ほぼすべての個体に一貫してこの成形手法がとられている事



図版1 口縁部の粘土接合痕

実から、埴輪生産が在地の土器生産にも関与した工人によって担われた可能性を強く示唆していると同時に、各工人が緊密な情報交換のもとに、集約的に埴輪生産をおこなった可能性が推測される。

胴部 (24~28・34~46) 段数は不明、かろうじて1段あたりの突帯間隔9cm以上が復元されるに過ぎない。器壁厚1.1~1.5cm。胴部径は30cm程度に復元されるが、細片から得られた値であり多少の誤差を含む。断定はできないが、楕円筒の可能性を示す資料や鰐とみられる破片は出土していない。

外面調整は、縦方向のハケ調整を主とし、突帯貼付位置付近をヨコナデ調整する。ハケの条数は、7~8条/cm。細片の場合、とくにハケ原体の施工方向の判断に迷うが、突帯方向との関係、ハケ主軸と器壁の円弧の方向などを根拠に、ヨコハケの不在を確認した。内面は、全般に磨耗が顕著で、調整を確認できる資料は少ない。しかし一部で、砂粒の移動痕跡から確実に縦方向のケズリ調整がなされている資料が確認できる（註4）。また一部に、ナデ調整を加えているものも認める。

透孔は、図示した資料（18・28・40~46）のほか、数点を認める。小片のため全体形状は不明ながら、三角形や方形（直線のみを残す破片資料が多いが、ハケの方向からそのうちに方形を含むと判断した）、円形（半円もしくはバーチの可能性もあるが断定できず、以下では円形として論をすすめる）が確認できる。方形と円形は一定量あり、確実な三角形は図示した1点のみ。各形態とも、1段あたりの孔数は不明。三角形が口縁部に、方形と円形は胴部にそれぞれ穿たれるようだが、後者の配置は不詳である。透孔はいずれもやや小さく、円形での復元径は、最大でも6cm程度となろうか。その穿孔方法は、穿孔部内面にみられる粘土の微細なせり出しから、ヘラ状工具を用いて外面からなされたと考えられる。

底部 (29) 確実に底部と判断できる資料は乏しく、出土した口縁部の破片数と比して大きな差異を認めざるをえない。底部がその特徴に乏しく、剥離や磨滅などによりそれと判断できる根拠が滅失してしまい、出土資料の中で見落としている可能性もありうる。1点のみ底部として図示したのは、器壁厚が1.8cmと、胴部のそれと比して著しく厚く、内面下半に横方向のケズリ調整が認められることを主な根拠とする。これを底部と判断すれば、底部高は9cm以上となる（註5）。外面は、胴部と同様にタテハケ調整する。

突帯 (19~28) 細部形状から、次の3タイプに分類される。aタイプ（19）は、上面が内湾して鈍くくぼむものである。端面は内傾する整った隅丸矩形を呈し、ヨコナデにより上端が若干摘み上げ気味に成形される。後述するbタイプと比して、入念に成形・調整される。bタイプは、概ね逆台形状を呈するもの。突出高が2.0cmを超えるb1類（20・25~27）と、同1.8cm程度のb2類（21）に細分される。端面は、やや強くヨコナデ調整され鈍くくぼみ、上下両端は弱く摘み出される。基本的に押圧痕がナデ消されずに残るなど、粗雑である。cタイプは、器壁に対して斜下方に貼付されるもの（22~24）。突帯上面は丁寧にナデ調整され、下面是比較的丁寧にヨコナデ調整されるも、浅く突帯貼付時の押圧痕が残される。端部は、幅0.4cm程度の隅丸矩形を呈し、やや外傾する端面に浅い沈線を1条施す。

突帯は、上述した大きく3タイプに分類され、その出土量は突帯bタイプがもっとも多く、次いでcタイプ、aタイプの順となる。こうした出土量の差が、何に起因するかは残念ながら現状では追及不可である。単純な工人の癖に収斂するのか、あるいは貼付位置の差をある程度反映しているか、現状では断定する根拠を欠く。今後の検討課題としておきたい。

また突帯は、多くが胴部より剥落して出土した。おそらく胴部壁体が乾燥した後、つまりは胴部の成形が一定程度終了した後まとめて貼付したために、壁体への接着力が弱く、衝撃により容易に剥落したと考えられる。突帯の剥落痕を観察した結果、突帯の設定時にその位置を決定するための刺突やナデは認

められず、有指標方式での設定技法（辻川2003）は採用されていないことがわかった（図版2）。これは製作された個体数が少なく、短期間に量産する必要がなかったためか、突帯の条数が3条程度と少なく、いわゆる目分量で一定程度の精度の突帯の貼付が可能であり、あえて特殊な技法を必要としなかったためと考えられる。

線刻（30～42） 線刻は、口縁部外面と胴部外面にそれぞれ施されたものが出土している。いずれも細片化により、線刻位置や個体数、意匠を含めて不明な点が多い。図示した以外にも数点の線刻資料を認めるが、基本的なヴァリエーションは図示資料で網羅していると考える。

口縁部には、いずれも二次口縁外面にV字状の線刻が描かれる（30～33）。33の資料から、線刻は連続せず単体で、同一個体に複数描かれていた場合でも、一定の間隔を置いて描かれていたと判断できる。しかし、図示した以外の資料を含めて接合資料が未確認で、1個体への線刻数は不詳。線刻位置から、都月型の口縁部鋸歯文の痕跡である可能性も考えられる。なお、線刻された口縁部のほぼすべてが、先に分類した口縁部Aタイプである。

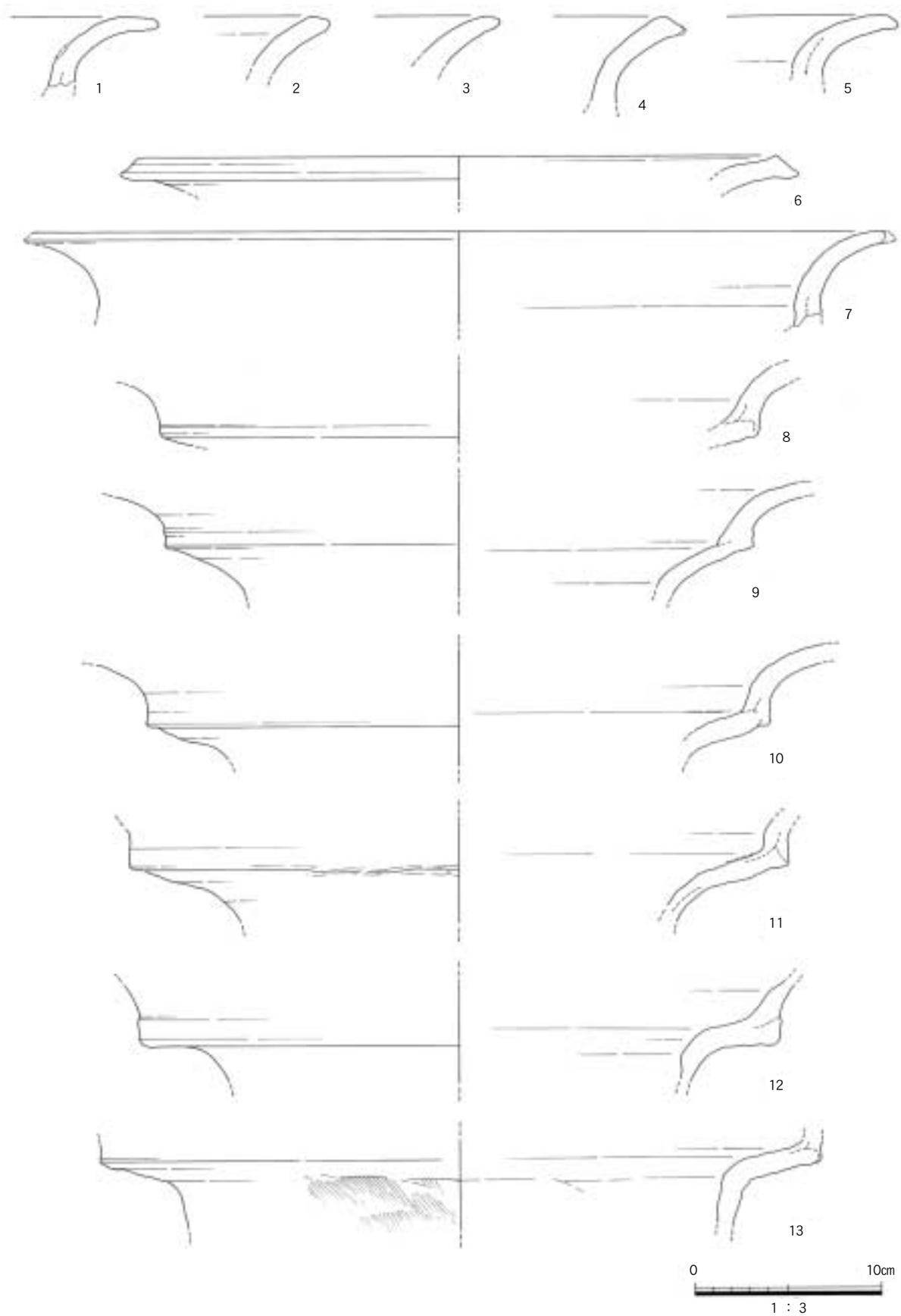
胴部への線刻例は、6点を図示した（34～42）。大半が、直線と曲線の単体もしくは単純な組合せであるが、34や38のように、複数の直・曲線が組み合った幾何学的な図形も描かれており、いわゆるヘラ記号ではなく、何らかの意匠をもった絵画的な図形も含まれていた可能性も考えられる。円形の透孔に近接して描かれる例（40～41）も一定数あり、両者に有意な関係性も想定できるが、具体的なモチーフを読み取ることはできない。

焼成・色調・胎土 出土したものはいずれも土師質で、一部に黒斑を認める。器表面が磨滅している資料が多く、全体に焼成はややあまい。色調は、明るい赤褐色ないし橙色を呈する。胎土の観察は、肉眼及び4倍程度のルーペを使用した。確認された鉱物種は、石英・長石を主として、少量の黒雲母および角閃石とみられる黒色細粒である。3mm前後の砂粒がもっとも多く、5mm超の石粒が少量含まれ、いずれも鋭利なエッジをもつ。資料や部位により、若干の鉱物種の含有頻度や砂粒のサイズなどに相違を認めるが、素地粘土採取地を異にするほどの差異とは考えられない。含有鉱物種は、いずれも花崗岩に由来する鉱物であり、在地の集落出土の土器の胎土と酷似しており、なお理化学的な分析を必要とするものの、円筒埴輪は古墳周辺で製作されたと考えられる。

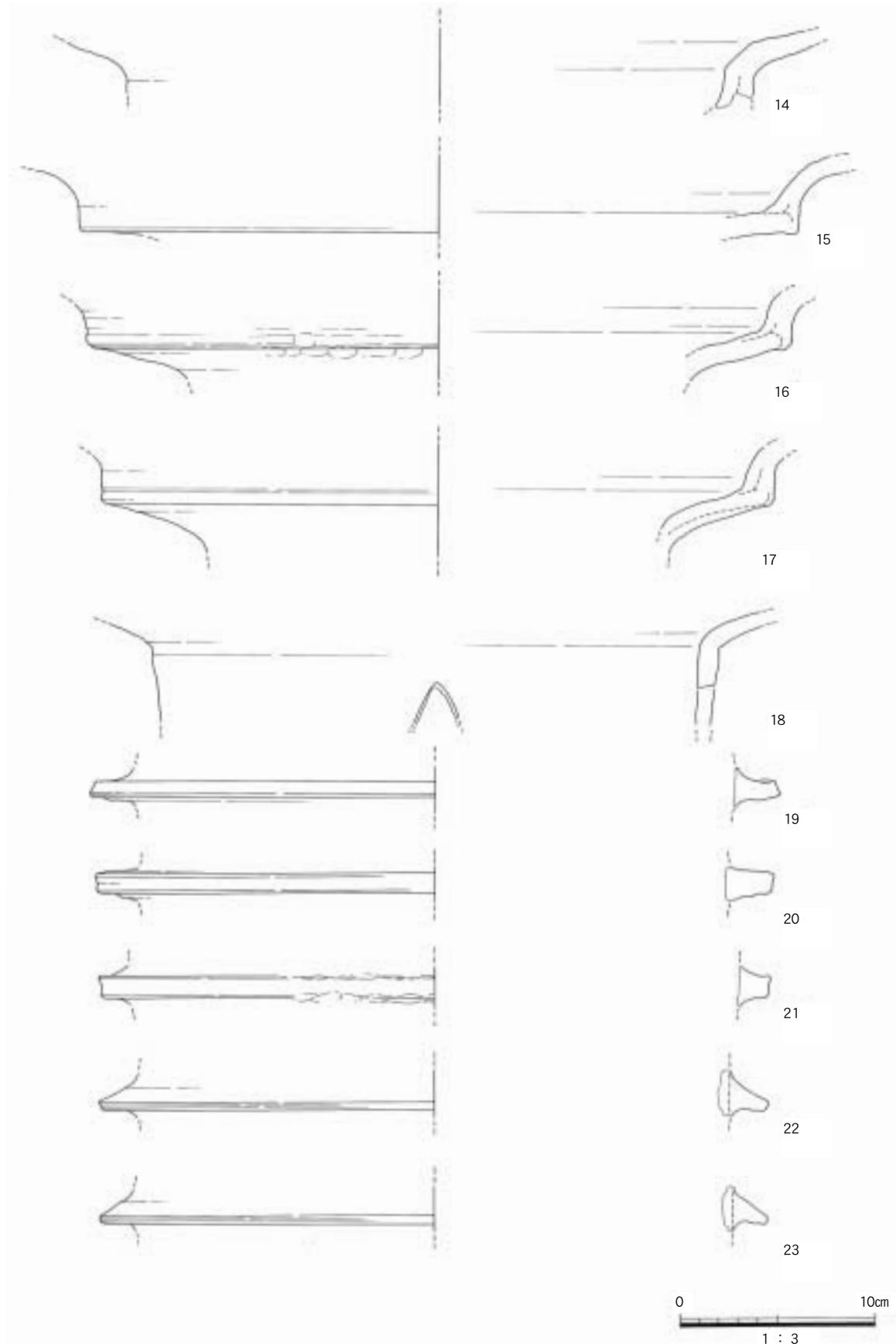
赤色顔料 全資料のおおよそ半数程度で、赤色顔料の塗彩が確認された。塗彩が確認されなかった資料は、いずれも調整痕も確認できない剥離・磨耗の顕著なものが多く、どの程度の頻度で顔料が塗彩されたかは不明である。観察には、肉眼と4倍程度のルーペを使用した。塗彩が確認される破片も、その一



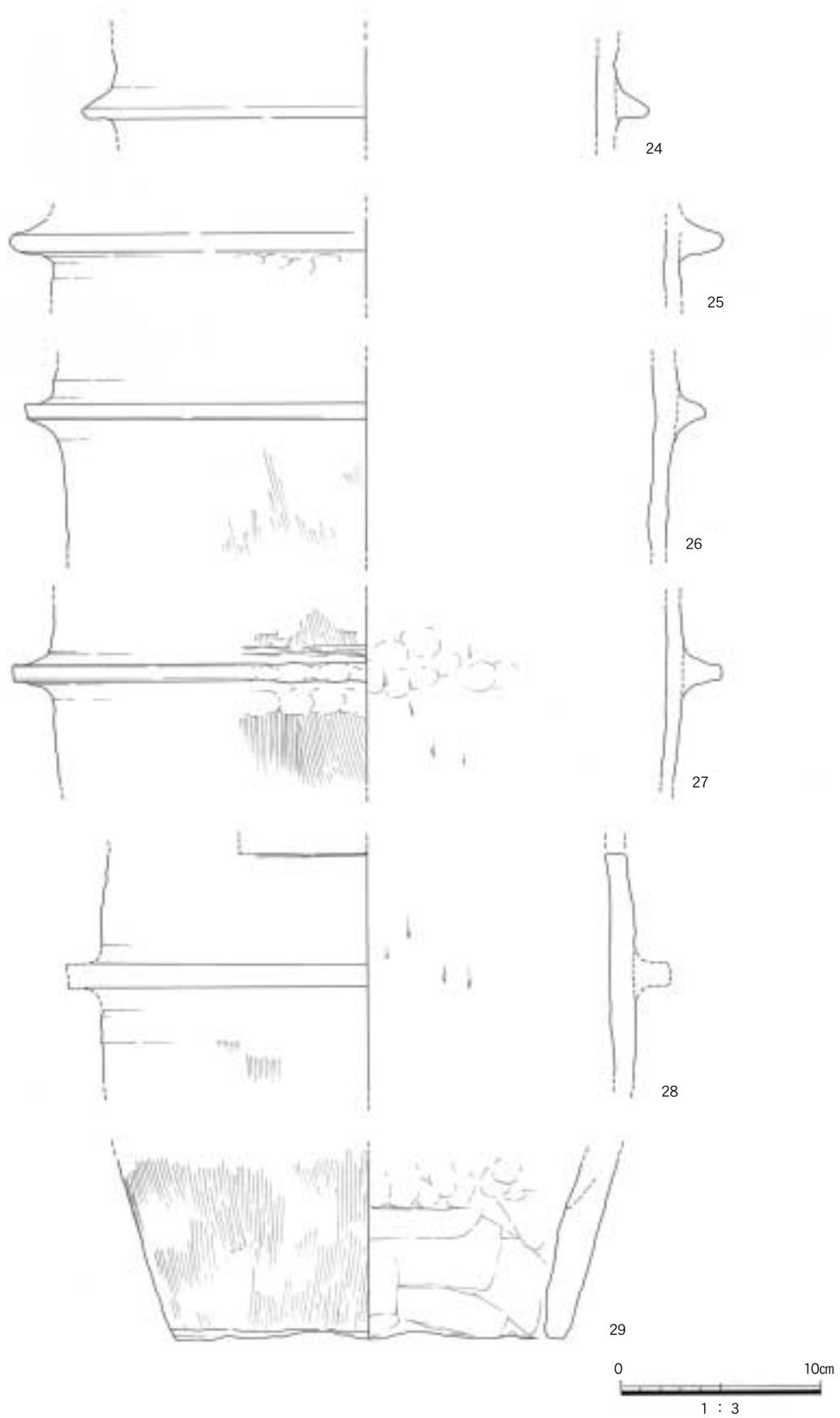
図版2 胴部突帯の剥離痕跡



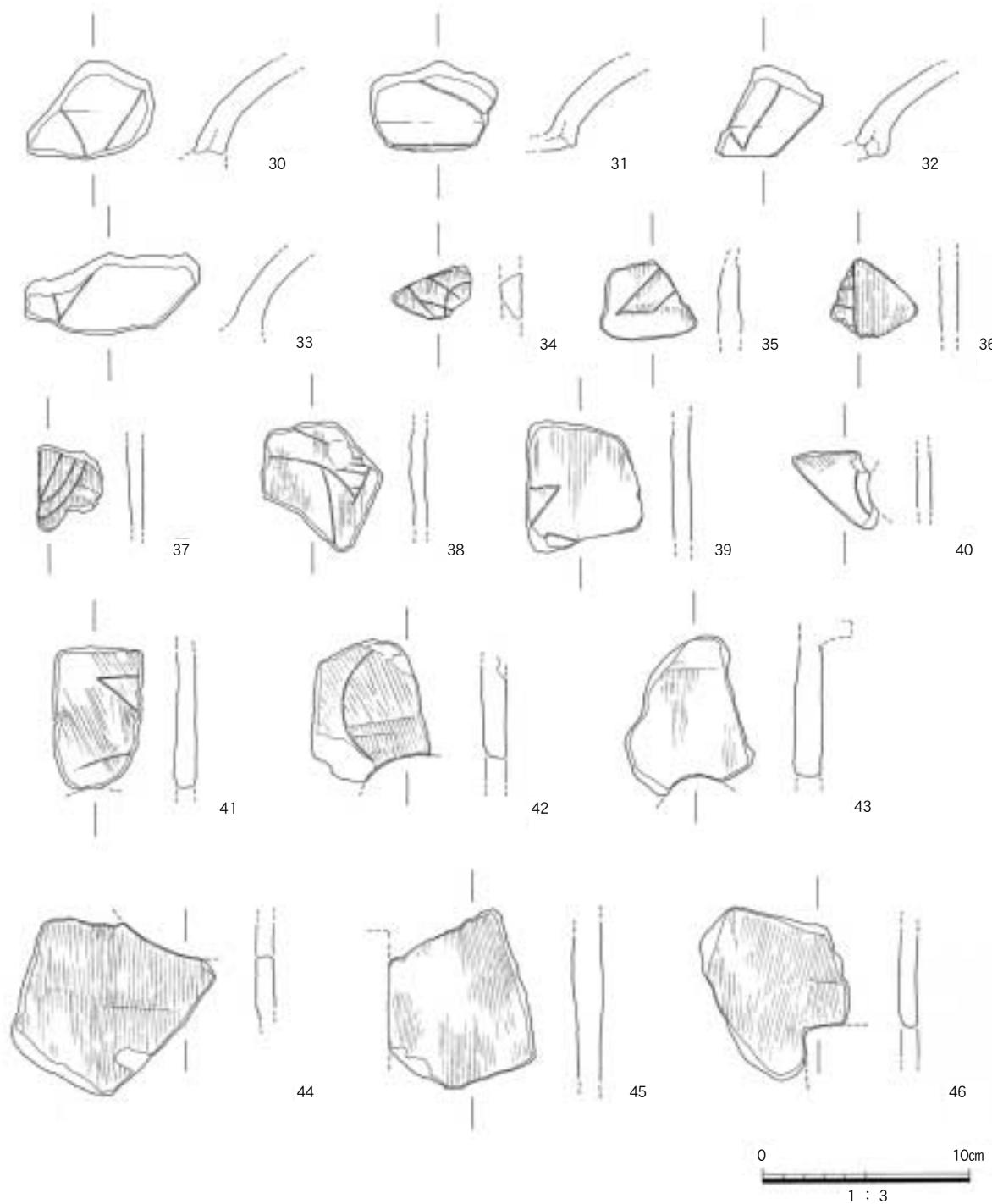
第1図 高松市茶臼山古墳出土埴輪実測図1



第2図 高松市茶臼山古墳出土埴輪実測図2



第3図 高松市茶臼山古墳出土埴輪実測図3



第4図 高松市茶臼山古墳出土埴輪実測図4

部に顔料が残存している状態で、剥落が顕著である。顔料は、いずれも外面で確認され、内面で確認された資料は皆無であり、本来的に内面には塗彩されなかつたと判断される。口縁部・胴部・突帯の各部で塗彩が確認されるが、底・胴部の塗彩範囲については断定する資料を欠く。胴部の破片でハケ等の調整痕が明瞭に確認されるにもかかわらず、塗彩が認められない資料も少數ではあるが確認され、胴部の一部が未塗彩である可能性も考えられる。塗彩は焼成後になされており、刷毛状の工具で塗布された可

能性が想定される。顔料は、以前おこなった蛍光X線分析で、ベンガラとの分析結果を得ている（註6）。

3. まとめ

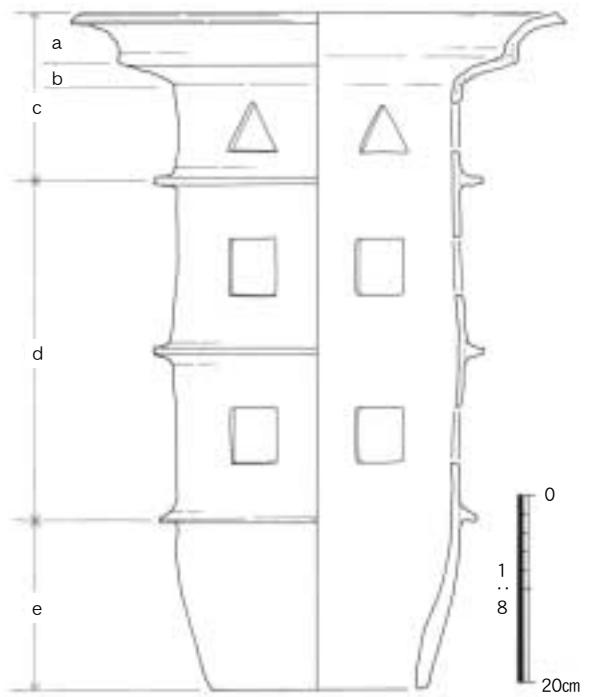
全体形状の推定復元 これまで検討してきた諸データから、円筒埴輪の全体形状の復元を試みよう。限られた資料であるため、一定程度の推測を交えることになるが、他の資料と比較する上でも、復元案の作成は不可欠と判断し、あえて私案を提示したい。

まず、復元に有意な情報の整理からおこなうこととする。口縁部は、受口状を呈するもののみで、細部形態を除けばヴァリエーションに乏しい。各部計測値も、細片化による誤差を斟酌すれば、複数タイプの存在を予定できる状況にはない。つまり復元される円筒埴輪は、1タイプとなる可能性が最も高い。透孔は三角・円・方形の3形態があり、三角形は口縁部に、円形と方形は胴部に、それぞれ穿たれている。底部透孔の有無について、限られた資料から判断することは困難だが、奈良県東殿塚古墳例などを除いて、古式の埴輪で底部に透孔を有する例は乏しく、本墳でも底部透孔はなかったと考えたい。以上の検討から、復元される埴輪は最小のもので2条3段となる。2条3段の円筒埴輪は、東殿塚古墳例を除けば、古式の円筒埴輪では類例に乏しいようだ。したがって2条3段を最小として、より大きな埴輪を求める必要があろうが、これ以上の推論は実証性に問題が生じる。

ここでは、胴部復元径と後述する突帯間隔から推定される器高とのバランスをもとに、同じ受口状口縁を共有する東殿塚古墳の鰐付円筒埴輪を参考例として、3条4段もしくは4条5段案を提示したい（第5図では、3条4段案の復元案を例示した）。いわゆるハケメパターンの検討など、より実証的な検討課題は残され、また今後の本格的な整理作業の結果訂正される可能性もあるが、現状ではとりあえず上掲2案の提示で満足することとしたい。

次に突帯間隔の復元に移る。この復元では、透孔に注目したい。まず円形透孔では、43の資料から突帯から透孔上端までの間は6cmほどと復元される。透孔の孔径は6～7cmほどであるので、透孔下端から突帯までも上端と同じ間隔だと仮定すれば、突帯間隔は18cmほどと復元される。方形透孔も同様に、28の資料の透孔が方形透孔の下端線であるなら、方形の透孔下端から突帯までの間隔は5.8cmであることが判明する。方形透孔の上下長は、45の資料から4.3cm以上と推測される。透孔上端から突帯までの間隔も、先の下端から突帯までの間隔と同程度と仮定するなら、突帯間隔は最低でも15.9cm以上となる。図示以外の資料から、方形透孔の上下長は6cm前後と推定され、突帯間隔は18cm程度が最も妥当性が高い数値といえそうだ。ここでもいくつか実証不可な前提を経て推論を試みており、参考値の提示にとどめておきたい。

以上の推定より、円筒埴輪は3条4段もしくは4条5段で、その割付方式は底部高より鐘方氏の分類のA類またはB類（鐘方2003）であったと推定され、仮に3条4段A1類であったと仮定するなら、器



第5図 高松市茶臼山古墳出土埴輪模式図
(a : 2次口縁 b : 1次口縁 c : 口縁部 d : 脇部 e : 底部)

高は $18 \times 4 = 72\text{cm}$ 前後となろう。

埴輪の供献 円筒埴輪は、その出土状況や出土量から、大量には樹立されておらず、前方部頂部に数個体が据え置かれていた可能性を推定した。円筒埴輪の破片とともに、壺形埴輪の破片も出土しており、壺形埴輪も同様に前方部に供献されていたことは間違いない。壺形埴輪は、その口縁部の破片から、器高40cm程度の中型の壺であったと考えられ、その量も円筒埴輪と同程度と推定できる。

この円筒埴輪と壺形埴輪が、どのような位置関係において供献されたか、それを知ることは現状では不可能だ。かつて私は、東四国地域の壺形埴輪を整理した際に、少なくともその初期には壺を載せる器台である円筒埴輪を欠落させ、壺が直接墳丘上に据え並べられた供献行為を復元した（蔵本2004）。本墳では、両者の出土状況やその体部最大径と口径の大きさの点から、円筒埴輪の上に壺形埴輪を載せて供献された可能性を推測することは十分可能である。この点は非常に重要で、伝統的な供献行為の変質が壺形埴輪の上にも及んでいる可能性を示唆する。

しかし、大阪府御旅山古墳では、円筒埴輪に東四国系壺形埴輪が供伴するが、それぞれ個別に囲繞供献されていたことが調査によって確かめられている（北野1994）。また大阪府将軍山古墳では、大型化した壺形埴輪が出土し、おそらくこれも墳丘上へ直接供献されたと考えられる。このような調査例から、円筒と壺がそれぞれ個別に供献された可能性も推測され、調査資料の公表と本格的な整理作業の結果を待って判断したい。

埴輪の製作 繰り返し述べてきたように、本墳に供献された円筒埴輪は数個体程度と推定され、壺形埴輪を含めても、その生産には限られた少数の工人しか関与していなかったことは容易に想像できる。先に細かく検討した口縁部や突帯形状の微細な差異を工人の癖と理解し、そのヴァリエーションから推測される工人数もこの想定を覆すものではない。また、既述したように、その口縁部の成形には、観察できる破片資料すべてに共通した技法が確認され、なおハケメパターンなどの詳細な検討を経る必要性はあるが、一定のまとまりのある工房内で集約的に製作された可能性を示唆する。さらに、肉眼観察から推測される素地粘土の採取地は古墳近傍での製作の可能性を示す。

上述した口縁部の成形技法は、弥生期以降の在地壺形土器のそれの延長上に位置付けられるものであり、その製作に在地出自の工人が関与したことは間違いない。一方で、東四国地域でもっとも早くに導入された円筒埴輪であり、その形態的諸特徴の造作は、畿内を発信源とする情報を直接受信可能な位置にある工人でなければ、実現不可能であっただろう。つまり具体的には、畿内地域で埴輪製作に関与したか、直接その技術を伝授する機会を得た、工人像を想像したい。したがってその埴輪の祖形となるモデルは、畿内地域にある。畿内地域の首長墓墳と高松市茶臼山古墳の被葬者間で、何らかの関係が取り結ばれ、古墳築造に際して、埋葬儀礼に関する情報交換がなされた。そうした情報交換の流れのなかで、高松市茶臼山古墳の被葬者が、円筒埴輪導入へと傾斜していく可能性を想定したい。そして、畿内地域の首長墓墳の候補のひとつとして、現状では大阪府将軍山古墳をあげたい（註7）。

こうして編成された高松市茶臼山古墳の埴輪製作集団のその後の展開については不明な点が多い。東四国地域で、受口状口縁の円筒埴輪の類例は仲多度郡多度津町御産盥山古墳より出土している（註8）。しかし、高松市茶臼山古墳例とは口縁部形状が異なり、同一系譜のものではないと思われる。また、後続する丸亀市快天山古墳では、受口状口縁の円筒埴輪は皆無で、いわゆる普通円筒系埴輪が導入されている。おそらくは、本集団は高松市茶臼山古墳築造を契機として編成された製作集団であり、その完成とともに解体されたと考えられる。こうした古墳築造を契機とした単発的な埴輪製作集団の編成は、高

橋克壽氏によって早くに指摘（高橋1994）されており、本墳では、それが在地出自の工人によって担われたことが実証可能な好例と考えられる。

埴輪からみた高松市茶臼山古墳の築造時期 旧稿において、本墳の埴輪を東四国地域における導入期の円筒埴輪と位置付けた（歳本2004）。現在でもこの考えは変わっていない。受口状口縁を有する円筒埴輪は、東四国地域では御産盤山古墳例を除いて類例に乏しく、さらに受口状口縁円筒埴輪と在地系壺形埴輪のみで構成されることを理由とする。こうした未だ定型化していない古式の様相を示す円筒埴輪、前方部裾より出土した張りのある体部倒卵形を呈する東四国系甕、定角式鉄鏃の多量副葬（註9）などを主な論拠とし、舶載鏡や鍬形石の年代をできる限り古く考えようとしたためである。

今回円筒埴輪を詳細に検討し、先述したように將軍山古墳との関係を認めるにいたった。直接的な系譜関係についてはなお課題だが、その形態的な近似性から、時期的な問題については参考となろう。その点で、本墳の築造時期を考察する上で、將軍山古墳との比較は避けて通れない。

報告者は、將軍山古墳の円筒埴輪が「川西編年Ⅰ期の範疇に収まる」ことをまず前提としたうえで、その「外反口縁は、向日市寺戸大塚古墳など他古墳におけるこの種の口縁部と比較してその外反度はさほど強くはない。むしろⅡ期の円筒埴輪の口縁部との型式的な近さを認めることができることからも、Ⅰ期の円筒埴輪の中では新しい段階に位置づけられる可能性」を指摘し、方形板革綴短甲の存在を重視して、「紫金山古墳よりは若干遅れて築造された」と述べる（廣瀬・若杉2005）。時期決定の比重は、円筒埴輪よりもむしろ短甲にある。

將軍山古墳と寺戸大塚古墳の円筒埴輪は、その口縁部形状において型式を異にし、直接両者の外反傾向を比較することには抵抗を感じる。寺戸大塚古墳の円筒埴輪の口縁部には、最上段の突帶上位に直立部分があり、將軍山古墳ではそれを欠く。むしろ將軍山古墳例は、大阪府玉手山1号墳例に近似し、突帶間隔も揃い、低位置突帶を除けば、ほぼ同一規格により成形された可能性も考えられ、時期的近接性を示していると考える。したがって、將軍山古墳は紫金山古墳より先行する可能性を指摘したい。

ここで問題となるのが、方形板革綴短甲であるが、奈良県鴨都波1号墳でのその出土例を考えるならば、同短甲の副葬上限が、紫金山古墳を遡ることを否定する理由は見当たらない。したがって、將軍山古墳の築造時期は、紫金山古墳より先行し、玉手山1号墳と同時期であり、高松市茶臼山古墳の築造時期も、これと近接した時期を想定する。

こうした検討を踏まえるなら、高松市茶臼山古墳の築造時期は、旧稿の編年觀では前4期に下らせる必要があり、旧稿の評価を訂正しておきたい。なお、それに連動して、普通円筒系埴輪を供獻する快天山古墳を前5期に下らせることも必要となる（註10）。

高松市茶臼山古墳築造の意義 高松市茶臼山古墳は、既述したように全長約75mの盛土前方後円墳である。時期的な先後関係が微妙な石清尾山古墳群の猫塚古墳を除けば、東四国地域で当時としては最大規模墳を誇る。石清尾山古墳群の群形成の盛期に築造され、埋葬施設や副葬品から導かれた「畿内的」とされる高松市茶臼山古墳は、一貫して積石塚を形成し、「在地的」とされる石清尾山古墳群との対比から、「畿内政権を背景として別途に登場し（中略）有力な在地勢力たる石清尾グループに対する畿内政権のけん制の表れ」と評価されてきた（香川県編1983）。

50mクラスの前方後円墳を中心とするB級古墳群である石清尾山古墳群（下垣2005）を、「畿内政権」が「けん制」する必要性がどのあたりに生じ、それがなぜ継続しなかったかなどは今後の課題だが、高松市茶臼山古墳の築造は、石清尾山古墳群の造営集団に何らかのインパクトを与えたことは事実だろう。

しかし、それを対立軸としてのみ評価することは必ずしも妥当ではない。

畿内有力首長層のどの集団と連携し、そこでどのような儀礼と器物の交換がなされたか。石清尾山古墳群の諸墳と高松市茶臼山古墳とでは、そのフレームが異なっていたのであろう。具体像をここで詳細に論じるには、もはや紙幅の余裕がない。既述したように、可能性のひとつとして高松市茶臼山古墳の被葬者は、將軍山古墳の被葬者と連携することで、埴輪祭祀の情報交換がなされた可能性を想定した。しかし、將軍山古墳には普通円筒系埴輪と大型化した壺形埴輪が供獻されているが、高松市茶臼山古墳は前者を欠落し、後者は通有の壺形埴輪で満足する。また北條芳隆氏によれば、將軍山古墳と徳島県愛宕山古墳との間には「墳丘規格の共有という直接的な交流」が想定できるという（北條2003）。しかし、同じ墳丘規格を高松市茶臼山古墳は共有しない。

交換される儀礼や器物や情報は、個々の古墳ごとに相違し、それが古墳間の階層化の方途として利用されたと考える。その意味で、「けん制」という言葉は価値をもつ。近年、大分県小熊山古墳など受口状口縁を有する円筒埴輪が前期中葉を前後する時期に、跛行的に瀬戸内周辺に拡散したことが明らかとなってきた。こうした動向は、畿内有力首長層による瀬戸内海航路の掌握の動きと複雑に絡み合って現象したと考える。高松市茶臼山古墳の円筒埴輪は、こうした畿内有力首長層の動向を解く鍵のひとつとなる。

以上、高松市茶臼山古墳の円筒埴輪の整理作業を通して、思いつくままに考えを述べてきた。雑駁な論となつた点は否めないし、無理な推論を重ねた感も強い。本墳はこれまで、埋葬施設や副葬品目に大きな関心が注がれ、既述したように先行研究も蓄積されつつある。今回、さらに円筒埴輪について、資料紹介をかねて若干の検討を加えることができた。残した検討課題は多いが、初期円筒埴輪の地方への波及の実態について、ひとつのケーススタディを提示することができたのではないかと考えている。本墳が有する情報は、本地域の地域史を理解する上できわめて豊かな内容を有しており、その研究の深化によってさらには列島規模の古墳時代史の研究に寄与することも予想される。そのためにも、調査資料の早期の公表が望まれる。最後に、今回の検討によって、高松市茶臼山古墳の重要性がより広く再認識されれば幸いである。

謝辞

香川県歴史博物館松本和彦氏には、遺物の実測作業に際し、格別のご配慮を賜った。ご迷惑をおかけしたことをまことに申し訳なくお詫びするとともに、氏の学恩に深く感謝いたします。また、一瀬和夫、大山真充、奥井哲秀、小栗明彦、鐘方正樹、十河良和、富田尚夫、山内英樹、吉田和彦の各氏には、資料の実見に際しあ世話になり、また有益なご教示を得た。掲載した遺物の実測は蔵本が行なったが、浄書は猪木原美恵子嬢の手を煩わした。これらすべての方に、末筆ではありますが深く感謝いたします。

番号	部位	法量	調整等	残存率	資料番号	備考
1	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K71	
2	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K74	外面塗彩
3	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K66	
4	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・磨減	細片	K231	外面塗彩
5	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K173	
6	口縁部	口径33.6cm	外面ヨコナデ、内面磨減	1/8以下		外面塗彩
7	口縁部	口径44.6cm	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K68	
8	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	1/8	K171	外面塗彩
9	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・磨減	1/8		埋文センター
10	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	1/8	K172	外面塗彩
11	口縁部	—	外面押圧・ヨコナデ、内面磨減	1/8以下	K231	外面塗彩
12	口縁部	—	外面ヨコナデ・磨減、内面磨減	1/8		埋文センター
13	口縁部	—	外面タテハケ後ヨコナデ、内面ヨコナデ・磨減	1/8	K68	外面塗彩
14	口縁部	—	内・外面磨減	1/8以下	K70	
15	口縁部	—	内外面ヨコナデ?磨減	1/8以下	K161	
16	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面ヨコナデ・磨減	1/8以下	K70	
17	口縁部	—	内外面ヨコナデ・磨減	1/8以下	K231	
18	口縁部	—	内外面磨減	1/8以下		埋文センター 三角形透孔
19	突帯	突帯35.0cm	ヨコナデ	1/8以下	K160	外面塗彩
20	突帯	突帯34.4cm	ヨコナデ	1/8以下	K228	外面塗彩
21	突帯	突帯34.0cm	ヨコナデ・押圧	細片	K68	外面塗彩
22	突帯	突帯34.0cm	ヨコナデ	1/8以下	K136	
23	突帯	突帯33.9cm	ヨコナデ	1/8以下	K136	
24	胴部	胴部25.0cm	外面ヨコナデ・磨減、内面磨減	1/8以下	K9	
25	胴部	胴部31.0cm	突帯下面押圧後ヨコナデ、内面磨減剥離	1/8	K165	外面塗彩
26	胴部	胴部30.0cm	胴部外面タテハケ、内面磨減剥離	1/8以下	K75	外面塗彩
27	胴部	胴部31.0cm	外面タテハケ後押圧ヨコナデ、内面縦ヶズリ	1/8以下	K68	外面塗彩
28	胴部	胴部26.6cm	外面タテハケ後突帯付近ヨコナデ、内面縦ヶズリ・磨減	1/8以下	K161	外面塗彩・方形透孔
29	底部	底径19.4cm	外面タテハケ、内面横ヶズリ・押圧・ナデ	1/8以下		埋文センター
30	口縁部	—	外面ヨコナデ?内面磨減	細片	K76	外面線刻・塗彩
31	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K76	外面線刻・塗彩
32	口縁部	—	外面ヨコナデ、内面磨減	細片	K76	外面線刻
33	口縁部	—	外面ヨコナデ?内面磨減	細片		外面線刻・塗彩
34	胴部?	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K135	外面線刻・塗彩?
35	胴部?	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K165	外面線刻
36	胴部?	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K37	外面線刻・塗彩
37	胴部?	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K66	外面線刻
38	胴部?	—	外面タテハケ、内面ケズリ?	細片	K78	外面線刻
39	胴部?	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K139	外面線刻
40	胴部	—	外面タテハケ・ナデ、内面磨減	細片	K71	外面線刻・塗彩、円形透孔
41	胴部	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K165	外面線刻、円形透孔
42	胴部	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K61	外面線刻、円形透孔
43	胴部	—	外面タテハケ後ヨコナデ、内面縦ヶズリ	細片	K165	外面塗彩、円形透孔
44	胴部	—	外面タテハケ、内面ケズリ?	細片	K68	外面塗彩、円形透孔
45	胴部	—	外面タテハケ、内面磨減	細片	K76	外面塗彩?方形透孔
46	胴部	—	外面タテハケ、内面ケズリ?	細片	K68	方形透孔

第1表 出土埴輪観察表

本文註

註1 このほか、旧高松経済専門学校地理学教授 寺田貞次氏によって採集された資料が、金刀比羅宮学芸参考館に所蔵されている。今回、寺田氏採集資料については調査をおこなっていないが、大久保徹也氏によって報告されているので参考とした（大久保1996）。

註2 図示した資料の資料番号は、観察表中に記している。また、移管時の再整理の概要については、（香川県2006）を参照した。

註3 近年廣瀬覚氏は、筆者のこの技法への理解を批判して、「頸部を「分割」して成形することに本質的な意味があったとは考えがたい」とし、「製作工程上、最も負荷のかかる頸部の下端を予め肩部から連続的に成形し乾燥させておくことでそこに一定の強度を持たせ、効率よく上部を立ち上げていくことが意識された」とした（廣瀬2005）。まず私は、「分割」を強調したこともなく、そこに本質的な意味があったとも述べていない。「期待する口径を維持しつつ口頸部の外側への歪みを最小限に抑える」こと（蔵本1999a）を意図した「乾燥」であり、それに伴う「分割」である。「分割」は結果であり、本質ではない。用語のなかの「分割」という部分に、誤解を与えた要因が存したかもしれない。用語を考案した当時は、むしろ成形作業のなかに断続的な乾燥工程を介在させることを重視し、それを「分割」と表現した、用語を補った記述からそうした趣旨が理解されると判断した。また粘土の荷重は、頸部から口縁部が緩やかに外反して開く広口形態では、その基部に集中することなく、頸部全体に分散すると考える。批判は批判として受け止め、この技法への理解が深まれば幸いである。

註4 寺田貞次氏採集資料中に、横方向のケズリ調整がなされている資料が、大久保氏により報告されている（大久保1996）。

註5 寺田貞次氏採集資料に底部破片があり、それによると底部高は17cm以上となる（大久保1996）。

註6 詳細については旧稿を参照いただきたい（蔵本2004b）。

註7 両古墳の円筒埴輪について、その口縁部や透孔の形状が近似する点を、主な論拠とする。また、將軍山古墳の「器台形円筒埴輪」に、高松市茶臼山古墳で認められた成形技法は用いられていないが、これは当然にその製作工人が異なるためであると理解したい。いっぽう、將軍山古墳と高松市茶臼山古墳から出土した壺形埴輪は、それぞれ形式を異にし、高松市茶臼山古墳には、普通円筒系埴輪は供献されていない。つまり、埴輪群がセットで共有されているわけでもない。したがって、円筒埴輪に関する限り、両古墳の関係性の論拠は、数少ないその形態的近似性のみとなり、その関係性を推定するには、なお課題は残る。しかし、將軍山古墳には、東四国地域に系譜をもつ埋葬儀礼が導入され、阿波産結晶片岩が石槨石材として大量に搬入されている事実などを積極的に評価し、高松市茶臼山古墳の被葬者が、將軍山古墳の被葬者との間で、埋葬儀礼に関する情報交換をおこなえる立場にあった可能性を想定したい。現状では、このように高松市茶臼山古墳の円筒埴輪の系譜的位置関係についてはなお今後の課題であり、あくまでもその可能性のひとつとして、將軍山古墳を想定しておきたい。

なお、こうした関係は、旧稿において東四国系壺形埴輪の供献を確認した大阪府御旅山古墳において、ほぼ同時期と考える將軍山古墳との間に埴輪の形式的相違が存在する点を踏まえるなら、東四国地域の首長との情報交換が、それぞれ個別になされたことを示していると考える。

註8 未実見。大久保徹也氏により報告された資料（大久保1996）を参考とした。

註9 概報に記載はないが、歴史博物館に本墳出土とされる17点の定角式鉄鎌が保管されている。

註10 旧稿で提示したこの編年案については、久住猛雄氏により批判が示されている（久住2006）。私も、一部に問題点があることは認識しており、個々の資料を再度詳細に検討し、別の機会に修正案を提示したいと考える。

引用・参考文献

宇垣匡雅1987「竪穴式石室の研究－使用石材の分析を中心に－（下）」『考古学研究』第34巻第2号

- 大久保徹也1996「まとめ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』, 香川県教育委員会
- 小山田宏一1993「画紋帶同向式神獸鏡とその日本への流入時期 一鏡からみた「3世紀の歴史的枠組み」の予察ー」『弥生文化博物館研究報告』第2集
- 香川県教育委員会編1970『茶臼山古墳 緊急発掘調査概報』
- 香川県教育委員会編1983『新編香川叢書 考古篇』
- 香川県歴史博物館編2006『収蔵資料目録 ー平成15年度ー』
- 鐘方正樹2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号
- 川口陽子2006「鍬形石の起源を探る ー現状と展望ー」『七隈史学』第7号
- 北野耕平1994「御旅山古墳」『羽曳野市史』第3巻史料編1, 羽曳野市
- 久住猛2006「土師器から見た前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』, 九州前方後円墳研究会
- 藏本晋司1994a「中間西井坪遺跡谷7出土土器について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊 中間西井坪遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会
- 藏本晋司1994b「讃岐における古墳出現の背景 ー東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察ー」『同上』
- 藏本晋司1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号
- 藏本晋司2004a「四国北東部を中心とした前半期古墳における石材利用についての基礎的研究」『関西大学考古学研究室開設50周年記念 考古学論叢』
- 藏本晋司2004b「丸亀市吉岡神社古墳の再検討 ー供献土器のありかたを中心としてー」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』XI
- 櫻井久之1991「鍬形石の系譜と流通」『考古学雑誌』第77巻第2号
- 下垣仁志2002「前方部埋葬論」『古代学研究』158号
- 下垣仁志2005「畿内大型古墳群考」『玉手山古墳群の研究V ー総括編ー』, 柏原市教育委員会
- 鈴木一有2004「平根系鉄鍬の諸相」『古代武器研究』第5号
- 高橋克壽1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号
- 玉城一枝1985「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米壽寿記念獻獻呈論文集』乾
- 辻川哲朗2003「突帶 ー突帶間隔設定技法を中心としてー」『埴輪 ー円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析ー』, 埋蔵文化財研究会
- 都出比呂志1986『堅穴式石室の地域性の研究 ー昭和60年度科学研究費補助金(一般C)研究成果報告書ー』
- 廣瀬覚2003「埴輪の伝播と工人論 ー前期古墳における生産組織分析の事例からー」『埴輪 ー円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析ー』, 埋蔵文化財研究会
- 廣瀬覚2005「壺形埴輪の大型化とその背景 ー將軍山古墳出土壺形埴輪の検討からー」『將軍山古墳Ⅰ ー考古学資料調査報告集1ー』, 茨木市
- 廣瀬覚・若杉智宏2005「埴輪からみた將軍山古墳の築造時期」『同上』
- 古瀬清秀1993「初期埴輪と畿内政権」『潮見浩先生退官記念論集 考古論集』
- 北條芳隆1996「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究』考察篇
- 北條芳隆2003「東四国地域における前方後円墳成立過程の解明」
- 松木武彦1996「前期古墳副葬鍬群の成立過程と構成 ー雪野山古墳出土鉄・銅鍬の検討によせてー」『雪野山古墳の研究』考察篇
- 森下章司2005「鏡と石製品からみた紫金山古墳」『紫金山古墳の研究』, 京都大学大学院史学研究科
- 渡辺貞幸1977「鍬形石の基礎的研究」『島根大学法文学部紀要』文学科編2